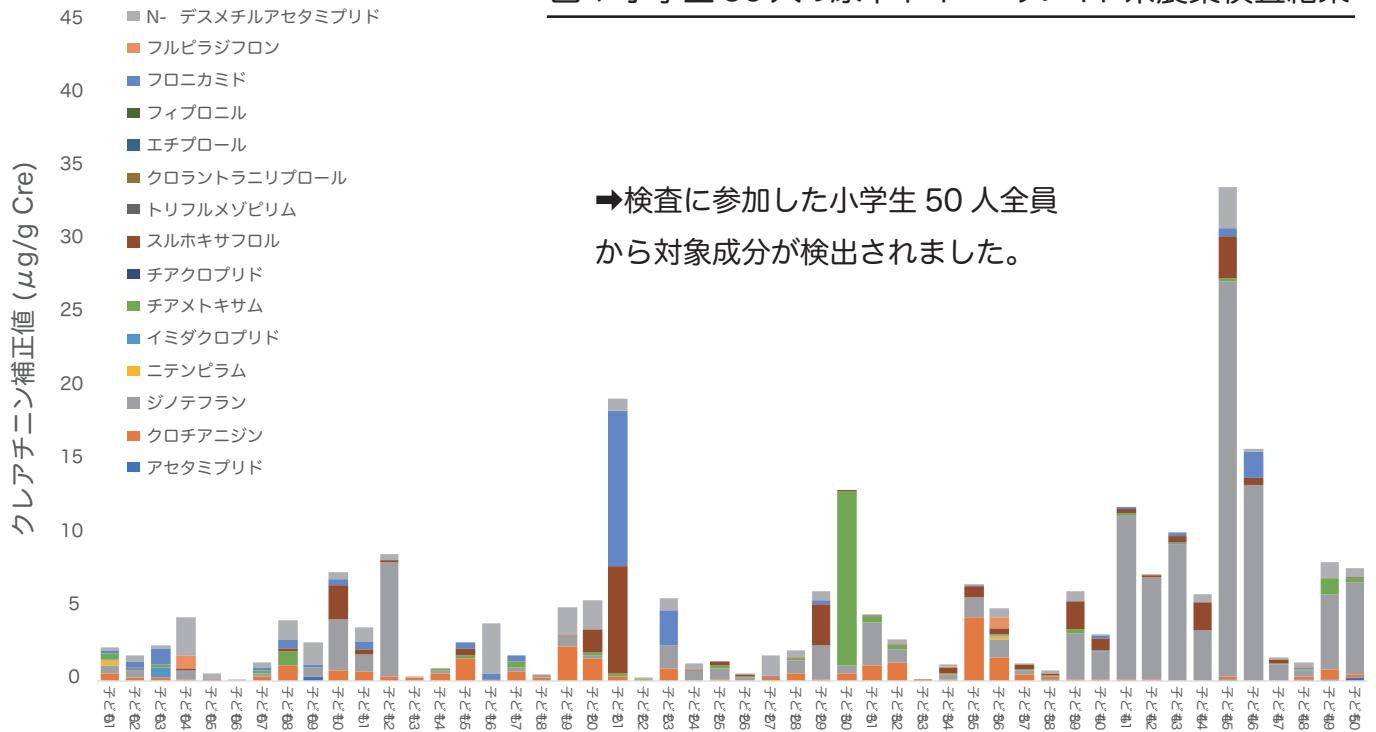


図1 小学生 50 人の尿中ネオニコチノイド系農薬検査結果



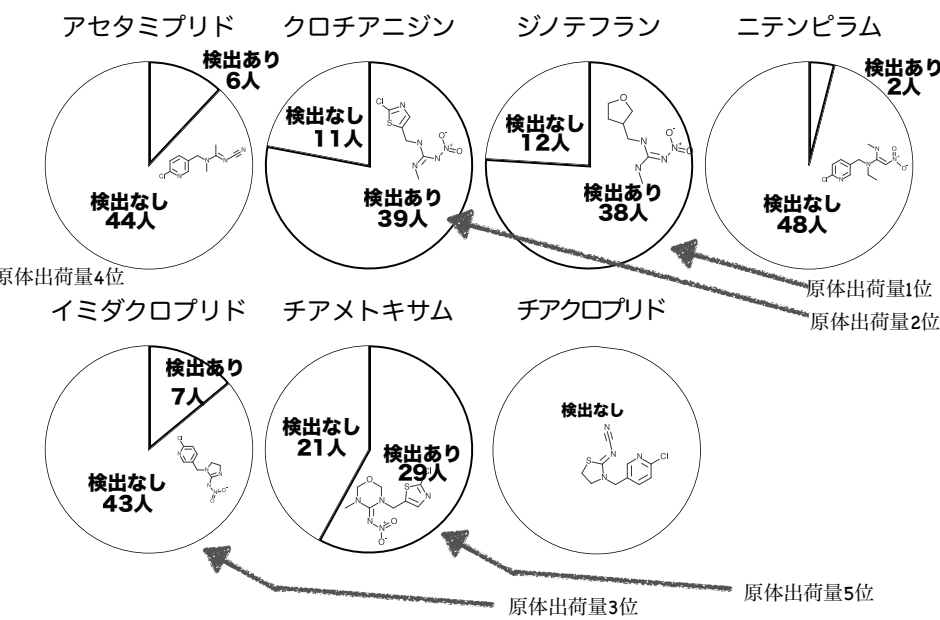
DPJ 子ども検査プロジェクト 小学生 50 人の尿検査

試験について

- ・給食を食べている小学生 50 人
- ・コープ自然派しこくと農民運動全国連合会女性部のみなさんを中心に協力者を募集。
- ・夏休みや冬休みなどの時期は避けて採尿
- ・ネオニコ 7 成分 + ネオニコ代謝物 1 + ネオニコ類似 7 成分

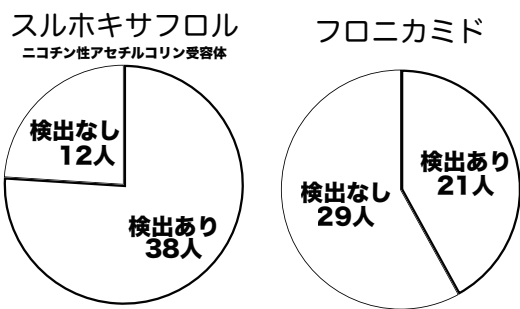
アセタミプリド, クロチアニジン, ジノテフラン, ニテンピラム, イミダクロプリド, チアメトキサム, チアクロプリド, スルホキサフロール, トリフルメゾピリム, クロラントラニリプロール, エチプロール, フィプロニル, フロニカミド, フルピラジフロン, N- デスメチルアセタミプリド

図 2 小学生 50 人から検出されたネオニコチノイド系農薬の検出率



⇒ネオニコチノイド系農薬 7 成分の検出は、それぞれの出荷量ランキングに合う形で検出されている傾向が見られました。特にクロチアニジン、ジノテフランの検出率は、これまでに行ってきた大人の検出率と一致する傾向がありました。

図 3 子ども 50 人から検出されたスルホキサフロルとフロニカミドの検出率



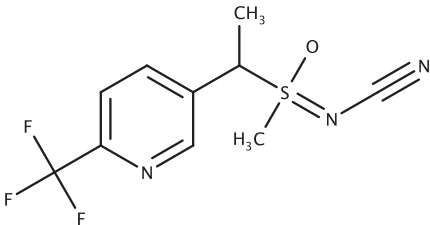
⇒ネオニコチノイド系農薬の代替として普及が進む浸透移行型殺虫剤のスルホキサフロルとフロニカミドの検出が高い傾向が見られました。この検出率の高さは、大人のデータと共通している傾向があります。どちらもフッ素系農薬で、代謝されにくい特徴を持っている可能性があります。

スルホキサフロル

⇒ネオニコ系農薬の代替薬として、普及が進む浸透移行型殺虫剤。(この農薬の経緯や特徴、課題は有機農業ニュースクリップさんのブックレットがわかりやすいのでお薦め)。農薬評価書では、あまり分解（代謝）されずに排出されることがうかがえるデータあり。PFAS として扱われる場合もあるフッ素系農薬の一つ。

フロニカミド

⇒ネオニコ代替薬として普及が進む浸透移行型殺虫剤。ニコチン性アセチルコリン受容体に作用。商品名に「ウララ」を含む製品の主成分。くだもの全般、野菜全般、いも類全般、茶と、広く登録があり、普及が進められている模様。なお、稲には登録はない。PFAS として扱われる場合もあるフッ素系農薬の一つ。年間 10 トン前後の出荷量。

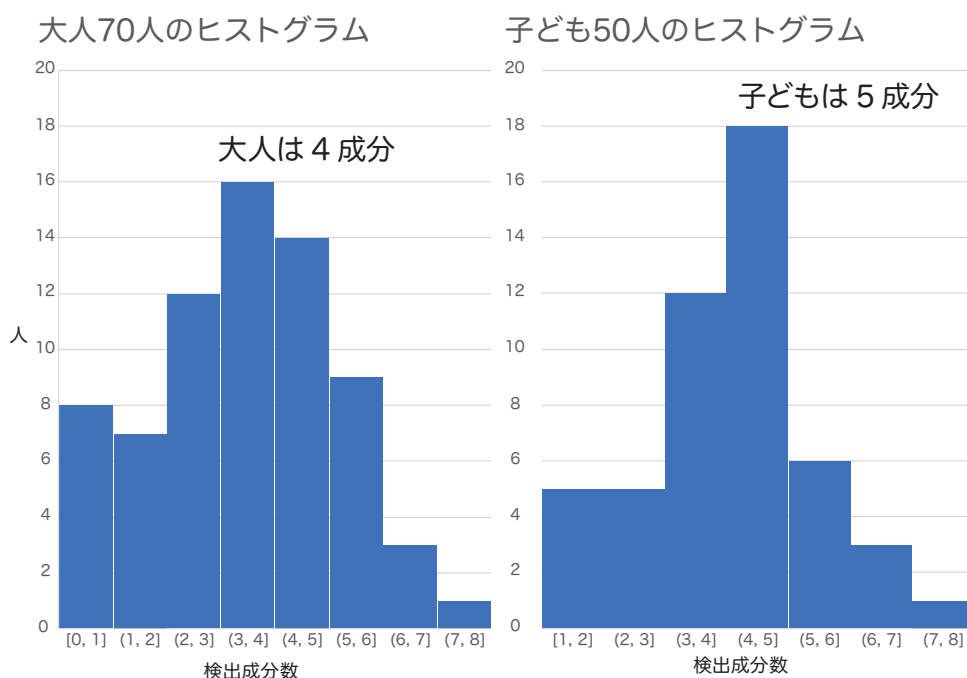


原体名	出荷量 [トまたはKL]	前年比	
		構成比	増減
ジノテフラン	158.7	38.4%	96.3%
クロチアニジン	72.5	16.4%	102.8%
イミダクロプリド	60.6	13.9%	101.6%
アセタミプリド	46.7	11.1%	97.9%
チアメトキサム	43.7	9.6%	106.0%
チアクロプリド	13.0	3.2%	95.8%
ニテンピラム	5.3	1.2%	104.5%
フルピラジフロ	0.0	0.0%	-
スルホキサフロル	22.7	3.8%	139.5%
トリフルメゾピリ	17.0	2.1%	192.3%
フルピリミ	3.6	0.3%	-
合計	443.7		103.4%

出典：国立環境研究所 化学物質データベース

表は有機農業ニュースクリップより

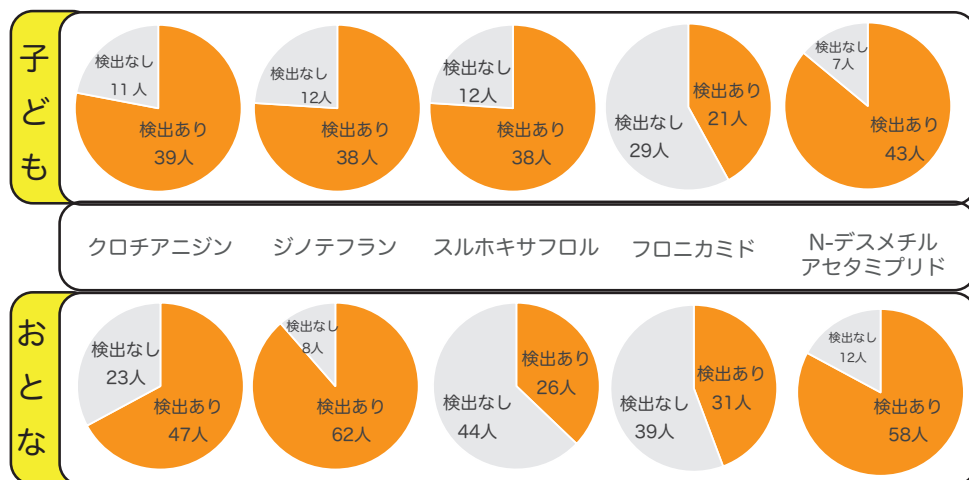
図 4 大人と子どもの農薬検出数を比較するヒストグラム



➡子ども1人から複数の検出が認められていて、その傾向は中央値で5成分。最大8成分の子ども。2024年までの調査で得られている大人70人のデータでは、大人は中央値で4成分検出という傾向。今回の結果では、子どものほうが、大人に比べて農薬数が多く検出される傾向*がありました。ただ、検出は、食による影響が大きいと推測されるため、子どもだから検出が多いという判断をするには食品も含めた調査が必要そうです。

*5%水準で有意差がある

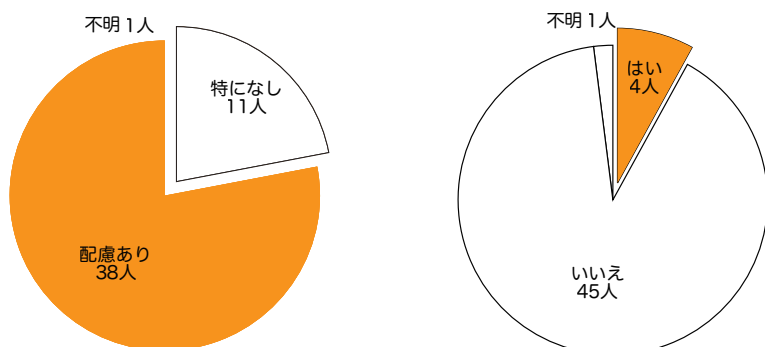
図 5 大人と子ども 代表的検出成分の検出率比較



➡大人でよく検出される成分と、子どもからよく検出された成分は共通している傾向がありました。また、その検出率も大人と子どもでは、似たような傾向が見られます。この調査の結果と比較では、スルホキサフロルについては、子どもの方が、大人より高い検出傾向があると見ていくことができます。

図 6 普段の食材に無農薬の配慮 / 給食の有機食材利用について

普段の食材に無農薬のもの配慮しているか 学校給食は有機食材を利用しているか



➡調査アンケートから、普段の食生活で有機や無農薬農産物を取り入れているという小学生が38人いました。コープ自然派しこくなど無農薬農産物が入手しやすい生協を利用することで農薬摂取が少ないと考えられる環境が背景にあることがうかがえます。農薬成分の検出は全てを無農薬で賄えないこと、外食、いただき物、給食などからの由来がうかがえます。